

在日アフリカ人民衆の商業ネットワーク —在日カメルーン人が創る地球規模のつながり

和 崎 春 日

キーワード：在日・滞日アフリカ人、中古自動車業、移民、ネットワーク、グローバル化、地球規模交流

Summary : Africans living in Japan try to tide over various kinds of prejudice and distinction emitted by majority of Japanese ordinary people on one side, and on the other side, they make efforts to make use of family bond and hometown networks woven by themselves in the world. First, the writer intends to analyze how ordinary middle-class Africans, this time e.g. Cameroonians, go out of their home countries and live in many foreign countries, not only Europe and America but also Asia, in recent days and finally many come to Japan for various purposes. Second, the writer is going to analyze how family members of Cameroonians living in Japan can scatter up to various countries of the world for works, studies and other purposes and how they as a whole can form the global networks of inter-dependence and mutual help if necessary.

はじめに—アフリカから見たモノ・人・ ことの多元的つながり

今日、アフリカから外国へ出る動きは、かつてのような金持ちや上層階級に限られる動態ではない。日本にアフリカ人がやって来る動態もまた同じである。私は、これまで、アフリカ人のモノの売買をめぐって、日本・中国などアジアに広がるその交易の様態を考察してきた^(注1)。とくに、中古自動車やパーツをめぐる商業の実態を、日本—アフリカをつないで考察してきた^(注2)。カメルーン・バムンの鋳物職人の一人は、パリでの売買を実現

し、今度は日本に行くための準備を真剣に私に依頼してきた。〈カメルーン—パリ—日本〉へという動きである。南アでの工芸博覧会に参加したバムン鋳物職人もいる。これらは、中下層の「普通の」アフリカ人が商売をめぐってアフリカから外国に出る動態である。こうしたアフリカ民衆の動きは、中国・アジアへと広がっている。在中カメルーン人女性は、髪結い業を営みつつ、ドアラに家族拠点を置いて、息子をチュニジアに派遣している。〈カメルーン—中国—チュニジア〉という網の目である。この近年のアフリカ人の動きは、かつてガーナからナイジェリアに出

(2)

在日アフリカ人民衆の商業ネットワーク

稼ぎに出ていたときの外国交流の枠のさらに外に出る。さらに、その前の時代にガーナ北部とナイジェリア北部でハウサ商人の歴史的な通商ネットワークが形成されていたときの外国交流とも、また異なる動きである。

ここ数年のアフリカ人の外国への動きは、かつての旧宗主国ヨーロッパとの交流をも相対化する、日本、中国、韓国などをターゲットとする直接のアジアへの結びつきの希求である。タイにも多数のアフリカ人が繊維をめぐる交易などで渡っている。ベトナム・ハノイにもアフリカ商人の動きが頻繁に見え始めた。中国とベトナムのプロ・サッカーリーグに所属するカメルーン人選手たちが、ハノイでおちあっている。また、ハノイの外国人集中地域タヒエン地区には、カメルーン・ンコンサンバ出身でロシア在住のカメルーン人商人が、機械、電化製品、服飾等の買い付けに来ていた。ロシア（旧ソ連）—ベトナムの歴史的な政治的つながりに、在ロシア・カメルーン商人が便乗してきているのである。〈カメルーン—ロシア—ベトナム〉という広がりである。このように、アフリカ人によるディアスポラ動態は、近年、アフリカ—日本の枠を超え、アフリカ—中国へと広まり^(注3)、さらに、新しい東アジア、東南アジア、そしてアジア全体への架橋をも大きく超えて、世界全体をまたぐ、まさにディアスポラとしてのアフリカ人動態を創出している^(注4)。その特権階級ではない「普通の」中層アフリカ人の世界に広がるネットワーク性をここに明らかにしようとするものである。

1 在日・滞日アフリカ人の生活に付随する多国籍性

1—a 在日拠点の自動車解体業

①埼玉でヤード（解体工場）をもって自動車解体業を営むグッディー（在日）
グッディーは、在日カメルーン人にしては、

めずらしくその配偶者がカメルーン人である。多くの在日カメルーン人で事業を起こそうとする者は、日本人と結婚している場合が多い。グッディーは、英語圏カメルーンのバリ出身、夫人はフランス語圏カメルーンのンコンサンバ出身である。グッディーは、埼玉県越谷・春日部から出発し国道をかなり離れた奥の過疎地にヤード（自動車解体工場、荷積み下ろし場）を構えている。ここには、カメルーンからやってきた中古自動車のバイヤーたちが、複数集まっている。それには、たとえば、ベルギーから来たエラスムスも含まれる。グッディーと同郷バリ出身のエラスムスは、ベルギーのブルッセルに自らのヤードを構え、そこからここに車を買集めに来る。もちろん、求める車を捜しては、グッディー以外の仲介業者のところにも商いを広げるが、幼馴染みで信用のおけるグッディーとの商売をまず第一に考えている。それは、バリの同郷性を共有するもう一人の在日カメルーン人中古自動車業者・ジャッキーとも同じである。

また、カメルーンのバメンダに在住するナイジェリア人も、グッディーのヤードに中古自動車集めにやってくる。このナイジェリア人は、バメンダの中央市場で薬局を営んでいる。だが、同時にこうして貿易業もやる。アフリカでは、職業をいくつも持つことは、ごく自然なことである。このナイジェリア人は、イボ人商人で、ナイジェリア・イボランドに住むときから、叔父が通商を行う隣国カメルーンのバメンダに早く行こうと望んでいた。隣国のカメルーン英語圏バメンダにやってきて、バメンダでの情報ネットワークを通じて在日カメルーン人商人の活動を知ったのである。叔父は、イボランドでは権威と信用をもつ「エゼ」のタイトル保持者であり、頻繁な故地ナイジェリアとの往復がある。したがって、その甥にあたるこのイボ人商人も、頻繁にバメンダからすぐ近くのナイジェリ

ア・イボランドとの往復を繰り返している。つまり、ナイジェリアのイボランドにもネットワークは広がる。こうして在日カメルーン人業者グッディーのネットワークは、〈日本—カメルーン—ナイジェリア〉へと広がるのである。グッディーは、アフリカ料理のレストランを、春日部から野田に延びる東武線の沿線で開いている。「みちんこ」という和食看板のある古い料理屋を買って、アフリカン・ジョイント・レストランというアフリカ料理店を開店した(写真1)。中古自動車業のヤードを開店すると、2—3週間、長いと2ヶ月の商売ビザでカメルーン人たちがやってくるから、それを応接しつなぎとめるアフリカ料理店が必要になる。エズメも同じ必要に迫られてアフリカン・レストランを開店している。野田近辺で開かれたこのアフリカン・レストランの開店祝賀会には、在日・滞日のカメルーン人とナイジェリア人が50人以上、集まっていた。そして、そのほとんど全員が中古自動車バイヤーやその関係業種の者であった。

②埼玉でヤードをもって中古自動車業を営むエズメの家族ネットワーク (在日)

エズメは、7人姉妹の一人である。カメルーンの首都ヤウンデには、故郷のバメンダから姉が2人と妹が1人出てきている。その妹がアントワヌである。このアントワヌ

の手元に日本から行く私にお土産の持参を頼むくらい、エズメとアントワヌはやりとりの頻度が多い。それは、この2人が7人姉妹のなかで経済的に最も成功を取めているからである。エズメは、埼玉の春日部近辺で中古自動車業を営み(写真2)、アフリカ・レストランも経営している成功者である。ここでは、年初めの在日カメルーン人会の総会が行われる(写真3)。カメルーン人男性と日本人女性の結婚祝賀の会も行われた。アントワヌは、今41歳で、首都ヤウンデに22年間住んでいる(2013年現在)。エズメは日本に来て10年になる。

その妹アントワヌは、ヤウンデのオムニスポール地区に住んでいる。日本から妹の3歳の息子に日本の法被風のオデンチを土産に



写真2 カメルーン人が昼夜働くヤード自動車解体場



写真1 アフリカ料理店の開店



写真3 年頭の在日カメルーン人会

(4)

在日アフリカ人民衆の商業ネットワーク

手渡してくれと預かった。彼女は、学歴の上では、ナイジェリアのカラバ・ポリテクニク高等専門学校（短期大学）に進学してアドミニストレーション・コースで2年間学び、カメルーンに帰国している。夫は、在アメリカで福祉関係の仕事をしている。ナイジェリアの高等専門学校に進学できたのは、父がカメルーン国籍であるもののナイジェリアの軍人として働いていたからである。彼女たちの出身地である英語圏の西カメルーンは、カメルーン国内のフランス語圏のカメルーンとよりも、西につながる隣国ナイジェリアとの交流や連携が大きいところがある。言語的にも、エジャガム語などカメルーンとナイジェリアをまたいで通じ合える。アントワヌは、まず、ポリテクニク卒業後、カメルーンでもっとも信頼できる銀行である Afri Land Bank でジェネラル・マネジャーとして5年間働いた。この経歴を認められ、より国際的な機関に就職できるようになり、イタリアに本部がある国際農業機関 FAO に、次いでイギリスのブリティッシュ・カウンセルに、その次にベルギー技術協力組織に就職し働いている。これら国際機関のオフィスは、すべて首都ヤウンデの高級住宅地であるバストス街区に集中して位置している。この街区での人的交流は、諸外国の情報の取得を促進するものである。日本の国際機関にも、この国際交流の場バストス街区での機縁をつうじて、その情報を獲得している。そして、日本にいる国際熱帯材木機関のカメルーン人事務局次長を紹介され、日本への来日を実現している。

こうして、姉エズメとともに、アントワヌは、国際熱帯材木機関の位置する横浜の事務局長宅に3か月間住み込んでいる。また、アントワヌは、夫と息子をアメリカに滞在させ、父子ともにアメリカ国籍を持っている。このように、エズメとアントワヌ姉妹の機縁の連鎖やその拡大展開は、諸外国をつないでいくという観点では、〈カメルーン—ナイ

ジェリア—イタリア—イギリス—ベルギー—アメリカ—日本〉という広い世界ネットワークを構築している。しかも、エズメの中古自動車の商売上の展望は、すでにドバイに向かっている。こうして、エズメ姉妹の機縁の連鎖は、さらにドバイにまでネットワークを広げようというグローバルな拡張性・発展性をもっている。

1—b 歓楽街での不安定職業

③六本木でキャバレーのビラ配りをするアントニー（在日）

アントニーは、六本木のバーのビラ配りを六本木三丁目の交差点を中心に行っている。カメルーンの出身地ヤウンデに近い町エトトのブルー系民族の出身である。日本に滞在できるようになったのは、叔父の政治力があつたからである。アントニーの叔父アタンガナ・ザングは、在日本カメルーン大使館の全権大使であった。その甥っ子アントニーは、叔父の紹介で在日本トルコ大使館のドライバーとしての働き口を得ることができた。このドライバーとしての職位も形だけのもので、実質の働き口は六本木の路上にある。アントニーは、奥さんと息子をアメリカに住まわせている。そして、いつもアメリカに行きたいと口にはしている。多くのアフリカ人が出産をアメリカの中で行いたいのは、その出産した赤子がアメリカ国籍を取得できるからである。ここで生むことに生活戦略上の意義がある。日本でおカネを貯めてアメリカに行くと言う。彼は〈カメルーン—日本—アメリカ〉のネットワークを持つ。

④六本木でキャバレーのビラ配りをするジェームス（在日）

ジェームスは、アントニーと同じように六本木で「H系」のキャバレーのビラ配りをしている。ただ、ジェームスがビラを配ったりして働く場所は、セネガル人やナイジェリア

人、マリ人などが集中して働く六本木3丁目の交差点ではない。この六本木3丁目の交差点は、日本人でも六本木で待ち合わせするときのもっともポピュラーでわかりやすいスポットである。東京っ子によく使われる待ち合わせ喫茶店「アマンド」は、この目の前にある。日比谷線の地下鉄六本木駅もすぐ目の前でわかりやすく、六本木の街中への入り口といえる。そこに、キャバレーやバーやライブハウス等のアフリカ人ピラ配りが待ち受けるのである。最も客を射とめる効率がよい場所だといえる。

ジェームスは、この交差点ではなく、ここから旧防衛庁の方に向かった六本木1丁目あたりにある、「H系」バーやキャバレー、「女子学生サロン」などが入る雑居ビルの前で、ピラを配って客引きをしている。なぜなら、彼は、この雑居ビルの中にあるキャバレーの受付兼客引きの仕事をしているからである。その意味で、ジェームスの方が、以前から日本や六本木により根付いて、交差点にいるアフリカ人に対して、生活経験の長さや職の安定度に「優越感」を抱いているところがある。単なる客引きだけというより、相対的に安定した仕事を任されているからである。ジェームスは、まず、父を頼ってロンドンに出ている。そして、ここで日本情報を得て、アフリカ人に仕事があるという東京・六本木にやってきた。六本木には、アフリカ人同士の詐欺まがいの話もよくあるという。六本木のナイジェリア人を頼ったナイジェリア人が騙されて一文無しになった、という話も聞く。そういう意味では、ジェームスは、カメルーン人の踊り子パーティに出会えたのは、幸運だった。彼女の紹介で、彼女が踊るキャバレーの呼子・パーティ係りの職を得られたからである。したがって、ここにはパーティも働いている。ジェームスは、＜カメルーンーロンドンー日本＞というネットワークをもっている。

1-c 頻繁なくカメルーンー日本＞往復を繰り返す中古自動車バイヤーと短期滞在者

⑤大学院を卒業して中古車バイヤーになったオランダ（滞日）

オランダは、ヤウンデ大学大学院の社会学人類学コースの修士号取得者である。しっかりした学識があるかは別として、それなりにアブナー・コーエンなどの政治人類学者の名前も知っている。修士号取得者と言うのも嘘ではない。日本ではじめてハイブリッド車が始めたとき、時代を先読みして、ハイブリッドの中古車をいち早く購入してカメルーンに持ってきていたのが、このオランダである。カメルーンでのハイブリッド車第一号車は、中古車でオランダが持ち込んだ。かれらは、時代を読む力がある。刻々の変化を読んでいる。それは、たとえば、ディーゼル・エンジン車の中古車をどこまで購入するかといった判断に現れている（写真4）。先進国では環境問題から販売中止に向かうから、購入は安くなるが、あとどのくらいの年月カメルーンで売れるか、などの判断が必要になる。オランダは、カメルーンから日本に来る直前にアメリカに渡って中古自動車をやはり収集している。ドイツにもよく買い付けに行く。つまり、オランダは、商業ネットワークとして＜カメルーンー日本ーアメリカードイツ＞のネットワークを持っている、ということである。



写真4 中古自動車オークション会場

(6)

在日アフリカ人民衆の商業ネットワーク

⑥日本につながるレヴランド・バフツ校長の類縁（滞日）

この校長の息子との出会いは、私たち日本のカメルーン学術調査隊が世話になったタクシー・ドライバーで、また私たち日本人を起点とした日本との交流を利して実業家にまで育ったセサミの紹介から始まる。それは、名古屋大学の大学院生・後藤澄子（現・リトルワールド学芸員）が西カメルーンの英語圏社会に調査に入ろうとしたとき、セサミの尽力によりミッション系のバフツ高等学校の校長先生へと紹介を受けたからである。その息子は、アメリカに行き、もっとも市民権を得やすい軍隊に入隊し、その軍隊のなかでももっとも厳しいとされる海軍に入隊して経歴を積み、市民権を獲得している。そして、この息子は、イラン・アフガニスタンで緊張が高まると、日本の横須賀に配属されて航空母艦と活動をともにしている。そして1年半の横須賀滞在の間に日本人の彼女を見つけて一緒に住んでいる。つまり、ここでは、〈カメルーン—アメリカ—日本〉そしてそれを支える学術交流を基礎とした〈カメルーン—日本〉の強い往復ネットワークのつながりが横たわっている。

2 日本—アフリカ関係が何重にも強化される往復関係—強いパイプの創生

2-a 日本の伝統芸能に食い込むカメルーン人、TV取材に頻繁に訪れるカメルーン人

⑦カメルーン—日本往復型 i（在日） 常磐津師匠ワッシー・ヴァンサン

ワッシーと日本との出会いは、カメルーン・ヤウンデの街区ンコンカーナの自宅にある。ワッシーの母が営んでいた下宿屋には、首都ヤウンデの中下層の労働者もいた。ここからヤウンデの町中に出るのである。ワッシーと母は、西部のバミレケの町バンガンテ

から首都ヤウンデにやってきた。1993年、この下宿屋に、日本からの調査者・野元美佐が下宿して、ヤウンデ都市の人類学的調査を遂行することになった。1994年に野元美佐（現京都大学准教授、現名・平野美佐）が日本に帰国すると、その伝手を頼って東京生活圏の埼玉にすぐに来てきた。そして、自らの音楽の才能を活かして、アフリカ音楽ツアーをカメルーンに送り込んで食いつないでいた。音楽資源は、家族の中にあり、兄がパリでカメルーン音楽のCDをリリースしていた。この時から、日本の伝統音楽への傾斜を強め、そのことが自らの日本での芸能経済活動を強めることを察知していた。そして、伝統音楽・常磐津の弟子入りを果たし、その名取にもなっていたのである。したがって、その後は、毎年5月に日比谷公園や横浜港赤レンガで行われるアフリカン・フェスタ（在日アフリカ大使館連合主催、外務省共済）でも、青山や六本木のライブハウスでのライブでも常磐津演奏を混ぜたアフリカン・ミュージックを巧みな日本語トークショーの形で演奏している。東京アクセントから大阪弁に変えて、笑いをとる術も知っている。日本化を果たしている。ライブを宣伝するパンフレットにも「常磐津師匠ワッシー」の名前が載る。カメルーンでの経歴が「カメルーン国立の音楽学校」で学んだというふれこみが紹介されることもある。〈カメルーン—フランス—日本〉のネットワークを持つ。このカメルーン—日本関係は、幾度にもわたるカメルーン—パリ経由—日本の往来を通じて、何重にも強化される。何度も何年も下宿して博士論文の書きあげまでこのンコンカーナ街区と日本を往復した野元美佐もそうだが、筆者も、このワッシーのカメルーン—日本のネットワーク強化にかかわったことがある。ンコンカーナに住むワッシーの母を帰国の挨拶に訪ねた私は、袋をワッシーに渡してほしいという宅配を頼まれた。しかも、この中味は見えてはいけ

ないという。中味は薬であって、包みを開くとその効力がなくなってしまうから、いけないと諭された。こうして、私は、なにやら宗教医学的なものをカメルーン日本間で運んで、ワッシーのネットワークに乗ったのである。

⑧カメルーン—日本往復型 ii (在日) 能演 出家モーゼス

モーゼスは、カメルーンの英語圏の最大都市バメンダから北のチーフダム・バフツ首長領の出身である。英語圏出身であるのに、フランス語圏にあるカメルーンでトップ大学といわれるヤウンデ大学英文学科に入学し、その演劇科の大学院で演劇および演劇学を修めたのち、カメルーンのマスメディアや演劇シーンで俳優・演出家として、または演劇評論家として文芸活動に従事してきた。この間、パリやアメリカにも渡っている。1999年に、国際演劇協会日本支部長がカメルーンを訪れたことを契機に、日本との機縁ができ、これをきっかけに翌2000年国際演劇交流協会の招聘で日本の能・狂言の演劇祭に参加を果たした。ここで、野村万之丞の指導を受けている。このとき、演劇、歌謡、舞踏、伝統芸能などのフュージョンによるワークショップ『唐人相撲』10日間に参加した。この時より、野村万之丞を師と仰ぐようになり、翌2001年には文化庁のフェローシップ・プログラムで再度日本を訪れ、野村万之丞の指導を得た。ついで、日本への渡航への夢を持ち続け、2004年来日し、野村万之丞の演出による『復元・阿国歌舞伎』の重要な役を演じている。続いて、万之丞から重宝され、『耳なし芳一』の重要な役柄を配された。が、この開演前に万之丞は急逝した。カメルーンで、能・狂言の上演を果たすという夢と誓いのもとに、モーゼスは、カメルーン上演を目的の一つとした日本文化交流協会の設立をもって、ついにカメルーンでの能上演を果たす。そして、モーゼ

スは、志を果たして日本に「帰国」するのである。このように、モーゼスは、＜フランス—アメリカ—カメルーン—日本＞のつながりを持ちつつも、カメルーンと日本を何度も往復する。日本への傾斜を深め、在日カメルーン人会のなかでも重要な役割を担うキーマンとなっており、東京工業大学で開かれた在日カメルーン人会の年末パーティでは、前述のエズメとともに司会運行の責を果たしている。配偶者が日本人女性でないカメルーン人がこれだけカメルーン—日本を往来し、その結果、日本に滞在してしまえる例は珍しい。今は、東京北区の中学校で英語教師をしている。

⑨カメルーン—日本往復型 iii (滞日) TV プロデューサー・ジャンクオ

ジャンクオは、CRTVつまりカメルーン・テレビジョンのプロデューサーである。今までに日本を題材にして撮影しそれをカメルーンで発表し、その逆に、カメルーン取材番組を日本に紹介している。近年は、特に、NHK主催の国際映像番組コンクールに出品する形で番組を日本に持ち込んでいる。その題材は、カメルーンの伝統習俗を日米欧の近代北側基準に照らして批判・検討を加えるという趣旨のものが多く、したがって、日本人カメルーン研究者からはもっとカメルーン社会特質を日本に活かしようとする番組構成の作品を熱望する声も強い。そうした意見が出るくらいに、ジャンクオのカメルーン—日本間の交流は厚いということである。番組制作ではフランスとの交流もある。NHK主催の国際映像番組コンクールには、何度も出品し、2012年にも製作番組をもって来日している。＜日本—フランス—カメルーン＞のネットワークを持ちつつ、首都ヤウンデの前カメルーン三菱商事チャグオ代表とともに、日本通でならし、カメルーンでの両国友好協会に相当する「アフリカ日本ハウス」を立ち

(8)

在日アフリカ人民衆の商業ネットワーク

上げている。そして、ここでカメルーン初の日本語コンテストを開催しもしている。

2-b カメルーンからの呼び寄せと日本とどまりと—日本内ネットワークの活用

⑩学生から料理人兼ウェイトレスに転身したカロリーヌ（在日）

カロリーヌは、もともと大分にある、英語—日本語のバイリンガル教育がなされている太平洋立命館大学に留学してきていたカメルーン人留学生であった。経営学を学ぼうとしていた。カメルーンの故郷は、フランス語のバンガンテである。現在、日本にいる多くの英語圏出身のアングロフォン・カメルーン人と違って、フランス語を話すフランコフォン・カメルーン人である。通商の民として有名なバミレケ人である。彼女の大学の在学中に、母がカメルーンでの家族関係から、日本での永住を求めて大分に身を寄せてきた。母を養うために、学生アルバイトからもう少し実入りのある職業に転換しなくてはいけなくなった。ドリスから私のところにも、大分から就職活動の電話が直接かかってきた。この就職活動のさなか、後述するドリスから埼玉のアフリカン・レストランでの後釜探しに遭遇する。ドリスが出産を機に、カメルーンに帰国するためである。つまり、日本のなかで、カメルーン人の就業にかかわる情報ネットワークがやはり張られている、ということである。大分と埼玉を繋いでいる。不安定とはいえ、定期的な収入源にありつくことができた。母とカロリーヌに東京であった私は、託されたNike印の靴と鞆をカメルーン・ドアラのボナムサディ街区にいる妹のところを持っていった。ここで、カロリーヌの弟がドイツに留学し、会計士の勉強をしていることを知る。ドイツでのカメルーン人・ネットワークでカメルーン人女性と結婚している。次の弟はスペインにおり、さらにカメルーンに妹と同居する弟がいた。つまり、ここでは<カ

メルーン—日本>の繋がりを活用して、家族の日本への呼び寄せが可能となった、ということである。しかも、彼女のネットワークは、<カメルーン—日本—ドイツ—スペイン>に張られ、そのなかで母を呼び寄せる最も都合のいい外地を、世界に張られたネットワークから選んだのである。

⑪カメルーン滞日・往復から在日へ—日本カメルーン民衆交流の祖セサミ・アバナス

セサミ・アバナスは、カメルーン人の中で日本とのコンタクトから成功を果たした、伝説的な立志伝中の人物である。セサミは、カメルーンのパメンダ、その北にあるバフツ王国の出身である。パメンダ市に行くと、この都市を構成する4つの伝統王国に出会う。それは、バフツ王国、ンクエン王国、バリ王国、マンコン王国の4つである。この4つが伸びてきて重なり結ぶ位置に、英語圏で最大の、カメルーン第4の大都市パメンダがある。したがって、パメンダの町中からは、中心からンクエン王国の宮廷のある外延へ伸びていって、それがパメンダ中心から4マイルだと、ンクエン・マイル4というようにその地を表現する。パメンダ中心から北にバフツ王国、南にバリ王国、西にンクエン王国、東にマンコン王国が位置している。そこで、それぞれの王国の伝統文化は異なるのだが、パメンダ近辺の庶民は、バフツ王国の民はもちろん他の3王国出身者でも、日本との通商で成功した最初の人物として、セサミのことを認知している。それほどに、中古自動車関係の売買では、カメルーン—日本の通商のフロンティア開拓者と言える。

1976年当時、カメルーンには、日本からの調査隊を組んだ正式の学術調査の一隊がパメンダを含む英語圏の西カメルーンに入った。富川盛道教授を隊長、日野舜也助教授（当時）を副隊長とする東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所のカメルーン学術調査隊で

ある。この英語圏の西カメルーン担当が、端信行国立民族学博物館助教授と森淳大阪芸術大学教授（ともに当時）であった。この森教授の西カメルーン工芸・芸術研究の流れが、のちのち建築の下休場千秋教授、染色工芸の井関和代教授による、現在の大阪芸大隊に引き継がれていくのである。そして、下休場教授は、バフツ王国の宮廷貴族に叙任されるまでにその交流は、深まっている。

最初に西カメルーン調査に入った当時、その調査の「足」として、バメンダ市内はもちろろんバメンダ市街へ各4王国などに伸びていくときなど特に、タクシーのチャーターが毎日のように行われた。そして、何台ものタクシーがチャーターされたあと、時間の厳守性、金銭授受の信頼性、出身地情報の理解度とその説明能力、地元につなぐ力、普段の仕事に向ける誠実さなどから、最も信頼に足るタクシー・ドライバーとして選ばれたのが、セサミ・アバナスである。彼は、バメンダ郊外のマンコン王国に集まった端教授、森教授、私を前に、そのとき進んでいる恋愛について語った。それは、おおらかな、ときに「奔放な」とうつるアフリカ恋愛文化とは対極をなす、自省に満ちた、結婚成就までの徹底して禁欲的なカメルーン版「プロテスタンティズムの成立と資本主義の精神」の姿勢であった。端、森両教授は「セサミなら信頼できる」から「彼は成功する」という感触さえ抱いた。黄色に塗られたカメルーンのタクシー事情では、車の運転は、車のオーナーではなく雇われた運転手がおこなう。ドライバーは、雇用主である親方に決められた金額を渡し歩合で日銭を稼いでいく。その雇われドライバーが、3年後には、自分が持つ中古自動車によるタクシー運転手になっていた。オーナーになっていた。数年後には、タクシー数台を保有し経営していた。

フランスからの独立以後1970年初頭にはフランス車が多かったカメルーンだが、次第に

経済的でいて丈夫なトヨタ車が人気を博するようになった。だが、その貿易・流通は、CAMITOTYOTA という会社に独占され、フランス経由の貿易となっていた。この自動車業に係る貿易に目を向け、セサミは、いち早く日本に直接行って中古自動車を個人規模の通商とはいえコンテナでカメルーンに送るという商売を開拓した。茨城県伏木、名古屋、大分などでの長期滞在を含め、何回もカメルーンー日本を往復している。2ヶ月の商業VISA がいっぱいになると、日本の大阪芸大関係者の縁者が住むシンガポールに出て、そこからまた入国し長期の日本滞在を可能にした。これと並行して10年後には、TEXACO のガソリンスタンド経営にも乗り出した。次いで、バメンダ市全体の運輸業界会長になった。さらに、これをカメルーンの首都ヤウンデ、最大都市ドアラ、第3の都市バフサン、北部の都市ンガウンデレなどのタクシー・運輸業者と連携して諸都市をつなぎ全国運輸業連合会を組織し、その会長となった。

こうした社会的業績を認められ、中学校までという学歴を乗り越えて、母国バフツ王国で王を囲む長老の称号を王から与えられている。そしてさらに、大学院卒などを登用するのではなく、王はバフツ王国の王国博物館の館長にセサミを任命した。2008年、大阪の国立民族学博物館で吉田憲司教授が世界の博物館ネットワークのシンポジウムを開催し、南ア、ザンビア、アメリカ、イギリス、ナイジェリアなどからの博物館代表者と並んで、カメルーンからは、バフツ王国博物館長のセサミが招待された。この国際シンポジウム開催中に、母国カメルーンでは、運輸業者たちがあまりの車両、燃料、ガソリン、輸出入など車関係の税金の負担に耐え切れないと、ストライキやデモが相次ぎそれが全国規模に広がった。このとき、現在のフランス語圏出身の大統領からすれば、もっとも政敵が多いと想定していたのが、英語圏の最大都市バメンダで

あり、バメンダでのデモを多数の死者をだすまでに鎮圧した。こうした政治状況のなかで、全カメルーン運輸業界代表のセサミは、帰国すれば「命がない」という状況に追い込まれ、日本に滞在し続け、カメルーン研究者を中心に亡命申請を行って、今、在留許可を得るまでに至っている。そして、就業許可をふくむVISAを得たことにより、就職活動を行い、やはり大阪の自動車関係の工場で職をみつめ働いている。

この間、セサミは、弟をたびたびベルギーの首都ブルッセルとアメリカに派遣している。ベルギー、アメリカでは、弟が断続的に滞在・生活していたが、アメリカでは滞在許可を得てファミリーの拠点化を果たしている。ベルギーの首都ブルッセルの最大の国際鉄道駅である南駅（ガール・ド・ミディ）にあるSammy's Cafeで、私はセサミ本人に出会い日本情報、カメルーン情報を交換した。ブルッセルは、ヨーロッパの共同体EUROの本部が位置するところであるとともに、日本の自動車産業の中心トヨタのヨーロッパ本部があるところである。ここに、トヨタ車に係る情報がすべて集まる。したがって、車関係の仕事がここに集積している。そのため、ここに中古自動車の売買でセサミがやってきたのである。私とセサミは、この1か月ほど前にカメルーンで出会い、そしてここブルッセルでも会った。このように、セサミは<カメルーン—フランス—ベルギー—アメリカ—日本>の広いネットワークを張るまでに至っている。日本での友人ネットワークを通じて、短期に国外に出て再度日本に入国する拠点を含めると、<シンガポール、タイ、韓国>などにもつながっている。

2-c カメルーンに撤退後も日本への再入国を狙う

⑫カメルーンに撤退し雌伏して再入国を狙う
ドリス—出産が理由

ドリスは、長い間、埼玉のナイジェリア人経営のアフリカン・レストランで料理人兼ウェイトレスとして働いていた。日本との交流とその結果としてのパイプ作りは、儲け話に乗りそうにない、したがって最も金儲けの「騙し騙され」とかけ離れた学術人との交流で築かれている。私がバメンダのドリス家族を訪問した際、その父は、故郷の村の文化協会の会長という名刺をもって、私に挨拶を交わした。そして、訪問の翌日、バメンダから30キロ離れた村にある儀礼に私を招待した。その儀礼は、伝統儀礼の様式をとっていたが、私のために村長など村の伝統的役員を総動員して「創造した」儀礼だった。「ワンジャ」任命儀礼といい、正式に村のメンバーに組み入れるというイニシエーション儀礼であった。私は、通過儀礼に欠かせない英語圏カメルーンの地一体に特色的な赤黒の伝統服を着て、同じくこの地の通過儀礼に欠かせないヤシ酒を回し飲みして共飲し、村の女性たちの甲高い「ヒュルヒュル」と聞こえる声による祝福を受けた。この通過儀礼を経て、私はワンジャつまり正式の村人になった。日本滞時にドナは、アフリカン・レストランにやって来るカメルーン人やナイジェリア人の商売話をもちろん耳にしていた。その情報やノウハウはかなり集積した。「私もお金を貯めてコンテナで中古自動車の貿易をやる」とよく囁いていた。

埼玉のアフリカン・レストランに食べに来ていたタイ人客や韓国人客とのパイプも活かそうとする。バメンダでは、レストラン営業を続けながら、このレストランによく来る客だった、ホスピタル・ラウンドアバウト近くにある日本在住カメルーン人中古自動車バイヤーの実家を訪ねて情報収集も継続している。そして、バンコックから、また違う年にはソウルから、私の元に電話がかかってきた。日本への再入国を試みたが、この時は果たされなかった。だが、彼女は虎視眈眈と生活を

かけて、日本での自動車業や電化製品の通商をにらんでいる。日本以外でも、こうして東アジアと東南アジアには、実際の来訪とそこでの、おそらくそれに随伴した商売とを実現している。単なる観光旅行にカメルーン人が来るとは、考えられない。それは、中国・広州に観光ビザでやってくるギニア、マリなど西アフリカの婦人たちが、どっさり衣料品・化粧品などの小物商売の元を買って帰ることからも、判ることである。こうして、ドリスは、〈カメルーン—日本—タイ—韓国〉というネットワークを持っている。

⑬カメルーンに撤退し捲土重来の再入国を狙う チョ・ピラス—事業が理由

チョ・ピラスは、埼玉大袋駅から車で30分もいったところにあるカメルーンレストランで、カメルーン人の集会があった際、またカメルーンから貿易商が来た際、レストランでの歓迎会や食事会に私が同席していた時には、しばしば自慢のトヨタ「4ランナーズ(カメルーン人がこう表現する車種)」で私を駅まで送ってくれた。日本人の彼女と一緒にいるところをアフリカン・レストランで見かけもした。チョ・ピラスは、自分でも中古自動車業の自律的な貿易商をてがけていたが、むしろその仕事の大半は、カメルーン・バメンダのH通りにあり兄のピーター・マキラが経営する「につぼん自動車」の日本での車収集バイヤーの仕事をしていた。車を購入し集め、コンテナに詰めカメルーンのドアラ港に送る仕事である。ピーター・マキラは、日本語が話せる日本通である。

バメンダのニホン・オートへの挨拶に訪れた私は、チョ・ピラスが帰国していることを知った。店番の、日本にいったこともあるマキラとチョの妹が、私に教えてくれた。すると、私の泊まるモンディアル・ホテルにチョが訪ねてきた。チョ・ピラスは、カメルーンへの帰国を物悲しそうに私に報告した。事業

拡大がうまくいかず帰国したところもあるが、日本人彼女とのわかれがたつらそうであった。だが、再度、ピーター・マキラのもつネットワークで、今度はカメルーンのパメンダで中古自動車業を手伝いながら、起業精神をふりしぼっていく、という。今度は、デンマークでの買い付けもあるだろうという。というのは、マキラは、〈カメルーン—日本—デンマーク〉と言うネットワークを持っているからである。また違う「弟」が、デンマークに「張って」いる。デンマークからの買い付け・輸送では、約2週間でカメルーン・ドアラ港に着く。前回の買い付けでは、5つのコンテナに28トンのパーツや中古自動車を積載して、カメルーンに荷が着いている。日本からカメルーンに帰っても、再度日本への事業展開を夢見つつ、家族が持つ〈カメルーン—日本—デンマーク〉ネットワークの上に乗っかって、仕事をするのである。

2-d まとめ

日本とアフリカの交流が、このように深まり広がってきた。たとえば、カメルーンと日本との交流で言えば、日本に来ているカメルーン人の母国の出身地(都市や村)は、23の町村を数えるほど細分化してきている^(注5)。それほど滞日カメルーン人が多いということであり、両国の交流が厚いということである^(注6)。また同時に、アフリカ—日本をまたぐ往還が繰り返されていき、それに添った「偶然の出会いが、思いもよらない偶然の出会いを生む」、つまり、「偶然の出会いが次の出会いを必然化する」という濃密なアフリカ—日本関係も生じてきている^(注7)。日本—アフリカ関係は、格段の深まりと広がりを見せている。日本には深く、世界には広く、関係の網の目を築いているのである(表1参照)。それを様々の生活の生き抜き戦略として、すぐさま発動したり潜在的な資源として保持したりして、活用していた。したがって、アフリ

表1 動きの中のカメルーン人ネットワーク

名前	職業	出身地	言語
アントニー	六本木	Yaounde	仏語
ジェームス	六本木	Mankon	英語
セサミ・アバナス	車	Bafut	英語
グッディー	車	Bali	英語
エズメ	車	Nkwen	英語
エラスムス	車	Bali	英語
オランド	車	Santa	英語
ピック	車	Mbengui	英語
アレックス	車	Mankon	英語
ピーター・マキラ	車	Mankon	英語
カロリース	ウエイトレス	Bangante	仏語
ドリス	ウエイトレス	Nja Etu	英語
エミリー	家政婦	Limbe	英語

カ人たちは、日本との深い関係が築かれていても、生活の必然と要求に応じて、いつでもこの多元的關係を利用して身軽に世界に移り住んでいく構えをもっている、と言える。アフリカ民衆のコスモポリタン性は、日本より高く大きい。

むすび—「普通の」アフリカ人が世界展開する時代

アフリカの「黒い真珠」という愛称で親しまれ世界のサッカーをリードし、昨年世界したエウゼビオ・ダ・シルヴァ・フェレイラは、かつてのポルトガル領東アフリカのロレンソ・マルケス、現在のモザンビークの首都マプトの生まれである。彼の父は同じポルトガル植民地でアフリカ西海岸にあるアンゴラの出身だが、アンゴラからアフリカ東海岸のモザンビークに鉱山労働者としてやってきた。また、青木澄夫のアジアアフリカ間の移動研究によれば、植民地時代、アジア・東チモールに行った日本人がポルトガル領のネットワークでアフリカ・モザンビークに移動して働くということもあった（中部大学国

際関係学部教授：談）。

今日のアフリカ人による諸外国への渡航・移動と定点化・中継地化は、植民地の宗主国を経由した、同じポルトガル語を話す、アンゴラからモザンビークの銅山へ、というようなアフリカ間の動きとは質的に異なる。こうした宗主国を軸とした人的、物的移動は頻繁に行われていた。1973年、東アフリカのタンザニア・アルーシャにある天理大学スワヒリ研究所を訪れた私は、そこで働く牧畜民マサイの老人ギラカイに会った。彼は、日本人を尊敬すると強く主張した。なぜなら、この、モランと呼んで勇壯を誇りとする牧畜戦士マサイは、日本兵の勇壯さを実際に見て尊敬に至ったと語る。このマサイ戦士は、植民地の宗主国イギリスを軸とした移動により、遠くアジアのビルマ戦線で兵士として日本軍兵士と戦ったのである。こうした意味では、互いに隣国ではないガーナとナイジェリアの労働移動・交流の一つの主要な要因も、旧宗主国イギリスを軸としたアフリカ間交流とも言える。

だが、ここ数年のアフリカ人の外国への動きは、こうした旧宗主国との交流をも相対化

する、ヨーロッパを抜きにしてその枠の外に出る、アフリカから見て大胆な「開拓の野心」の現れの営為である。「親からの叱り」を振り払った、「巣立ち」の意志である。あるいは、ヨーロッパにある家族定点は、植民地の歴史蓄積の延長線上にあるものだとしても、それはそれで平然と活用しつつ、その上にまったく植民地関係を引かずらないアジアとの関係を築き乗せている。日本や中国やアラブ首長国連邦などへのアフリカ人の移動は、心の桎梏から自らを解放する「主体」としての心意を含んでいる。今日、アフリカ人がアジアに来るために利用する飛行機も、かつてのようにアフリカから関係深いパリ、ブルッセル、ロンドン経由などとは大きく違ってきている。カメルーン・エアライン、ケニア・エアライン、エジプト・エアー、タイ・エアー、少しお金があればエミレーツ、カタール航空などを乗り継いで、ヨーロッパを経由せずに日本や中国にやって来るアフリカ人が多い。アフリカと日本や中国との直接の交流の時代になっている。

本稿で見てきたアフリカ人の結びつきは、母国と日本とを単線的につなぐなどというものではなかった。在日アフリカ人たちは、世界にいくつも大小の拠点や中継地を持っていた。アフリカー日本の2国間にしても、何度も多様な形でその関係を強化するように何重もの網が張られていた。また、日本でアフリカ人を受け入れる土壌も確実に広がり深まっている^(注8)。これらをグローバル・ネットワークと呼ぶ。そして、この実態から、今をグローバル化の時代と呼んでもよい。だが、それ以上に、こうした世界へのアフリカ人個々のディアスポラを総体として見たとき、一つの世界史的不平等のアフリカ人自身の意志による挽回と跳ね返しを認めることができる。隅に追いやられていたアフリカ人が「主語」となりうる、帝国史の相対化と上下の平準化が認められるからこそ、今をグローバル

化の黎明だと言えるのだと考える。ヨーロッパによる開拓の野心の対象となったのが、アフリカだった。上に見たように、今は、その逆転の動態と心意の充足が、「普通の」人々にとっても、ちょっと背伸びすれば実現される時代であることが明らかになってきた。それが可能となり始めているからこそ、今をグローバル時代の開始期と呼べるのである。カメルーンから「パリに媚びない」絵画のモダン・アートさえ発信されるようになった。さらに今、カメルーン的首都ヤウンデには、今まであった韓国系のスーパーに加えて、インド系のスーパーが入り込み、第1の大都市ドアラでは中華街が形成されつつある。カメルーンで小学校建設と言えば、民衆に日本の協力がすぐに想起される時代である。アジアとアフリカの相互の出入りは確実に増しつつある。アフリカにおけるアジアのプレゼンスが増している。韓国ソウルのイテウォン地区には、アフリカ人が集中している。中国広州には、20万人ものアフリカ人が滞在している。地球規模交流の実態をさらに明らかにするためには、こうした動態をより探っていかなければならないだろう。

注

- (1) 和崎春日「在日・在中アフリカ人の生活戦略とホスト社会の受容性」『研究論集』第36号、愛知大学短期大学部、2013年。pp.59-80。
- (2) 和崎春日「中古自動車業を生きる滞日アフリカ人の生活動態」『地域研究・特集アフリカ』Vol.9.No.1、京都大学地域研究統合情報センター、2009年、pp.260-279。
- (3) 和崎春日「アフリカへの中国人と中国へのアフリカ人」『神話・象徴・図像 I』篠田知和基編、楽瑯書院、2011年、pp.369-386。
- (4) 三島禎子「民族の離散と帰帰—ソニンケ商人の移動の歴史と現在」『ブラックディアスポラ』小倉充夫編、明石書店、2011年、pp.105-130、参照。
栗田和明『アジアで出会ったアフリカ人』昭和堂、2011年、全249pp。参照。
- (5) 和崎春日「産業人類学、都市人類学、超国家

(14) 在日アフリカ人民衆の商業ネットワーク

の人類学をつなぐもの—滞日アフリカ人の生
活動態から十時厳周の『混乱と境界侵犯の人類学』を見る』『法学研究』第84巻、第6号、p.216
図1を参照。

- (6) 和崎春日「日本—カメルーン往還の交流史」
『貿易風』Vol.8、中部大学国際関係学部、
2013年、pp.243-254。
- (7) 和崎春日「人類学方法論としての日本—アフリカ邂逅誌」『貿易風』Vol.9、中部大学国際
関係学部、2014年、pp.221-233。
- (8) 和崎春日「アフリカ人の日常生活に見るミク
ロ世界戦略」『中部大学民族資料博物館 調
査研究報告』平成24年度・平成25年度合併号、
2014年、p.11の写真10（熊本県ユニセフ協会
の活発な日本—アフリカ交流活動）参照。

付記

文中の人名表記のうち、アタンガナ・ザング、
ワッシー、チャグオ、ギラカイは了諾を得て実名
表記、他は仮名である。